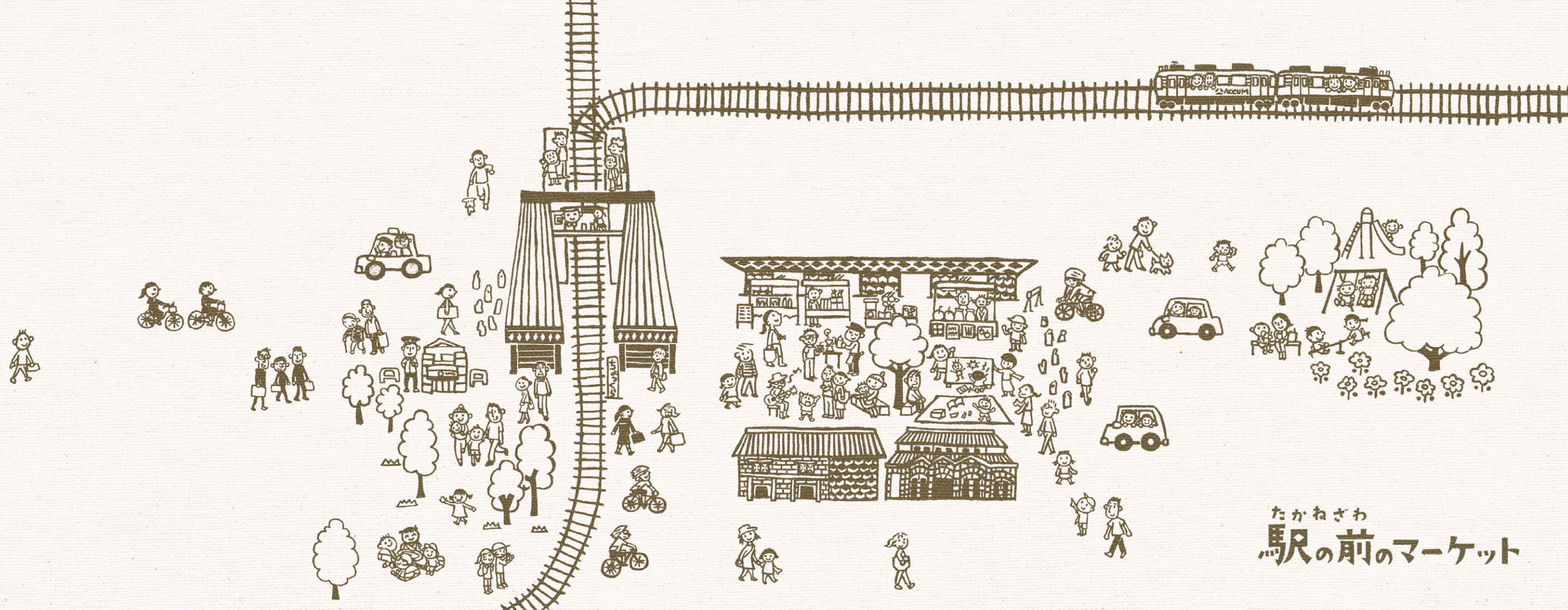
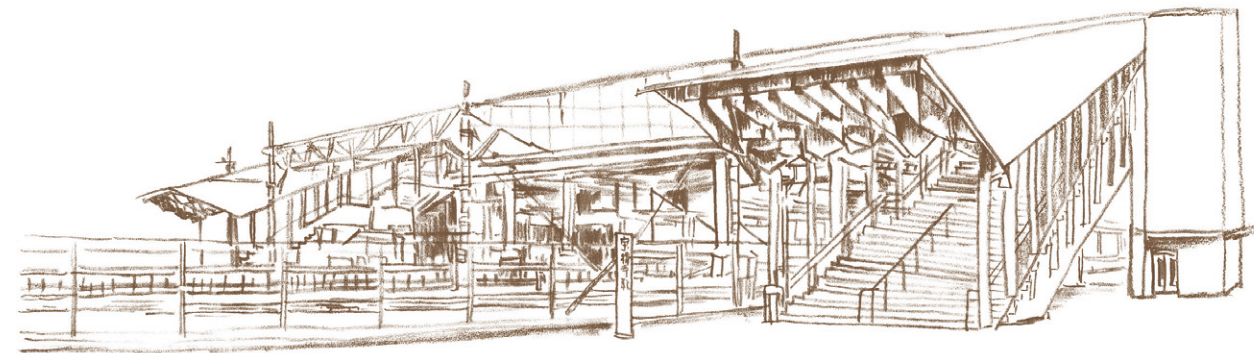




たかねざわ
馬の前のマーケット



駅前のマーケット

2016年10月発行

発行

制作・イラスト ひばらさんのデザイン工房

写真 plus photo,Kawamura Takako

物語原案

高根沢町

文月 帖

※この物語は、2016年7月に開催された「たかねざわ 駅前のマーケット」をもとに創作したフィクションです。

序章 コウサテン

宝積寺駅橋上駅舎。改札前。

1 番線。宇都宮から鬼怒川を越えてきた下り電車が、橋をくぐり停車し、黒磯、福島へと北上していく。

2 番線。那須連山のシルエットを背に停車した上り電車が、橋をくぐり、宇都宮、東京へとまっすぐに南下していく。

3 番線。キハ40形気動車、E V 系蓄電池駆動電車という対照的な電車が、頭上に架線のない宝積寺烏山間20kmあまりをのんびりと、東西に行き来する。

ここは南北へ、そして東西へ移動する人々が通り過ぎる交差点。

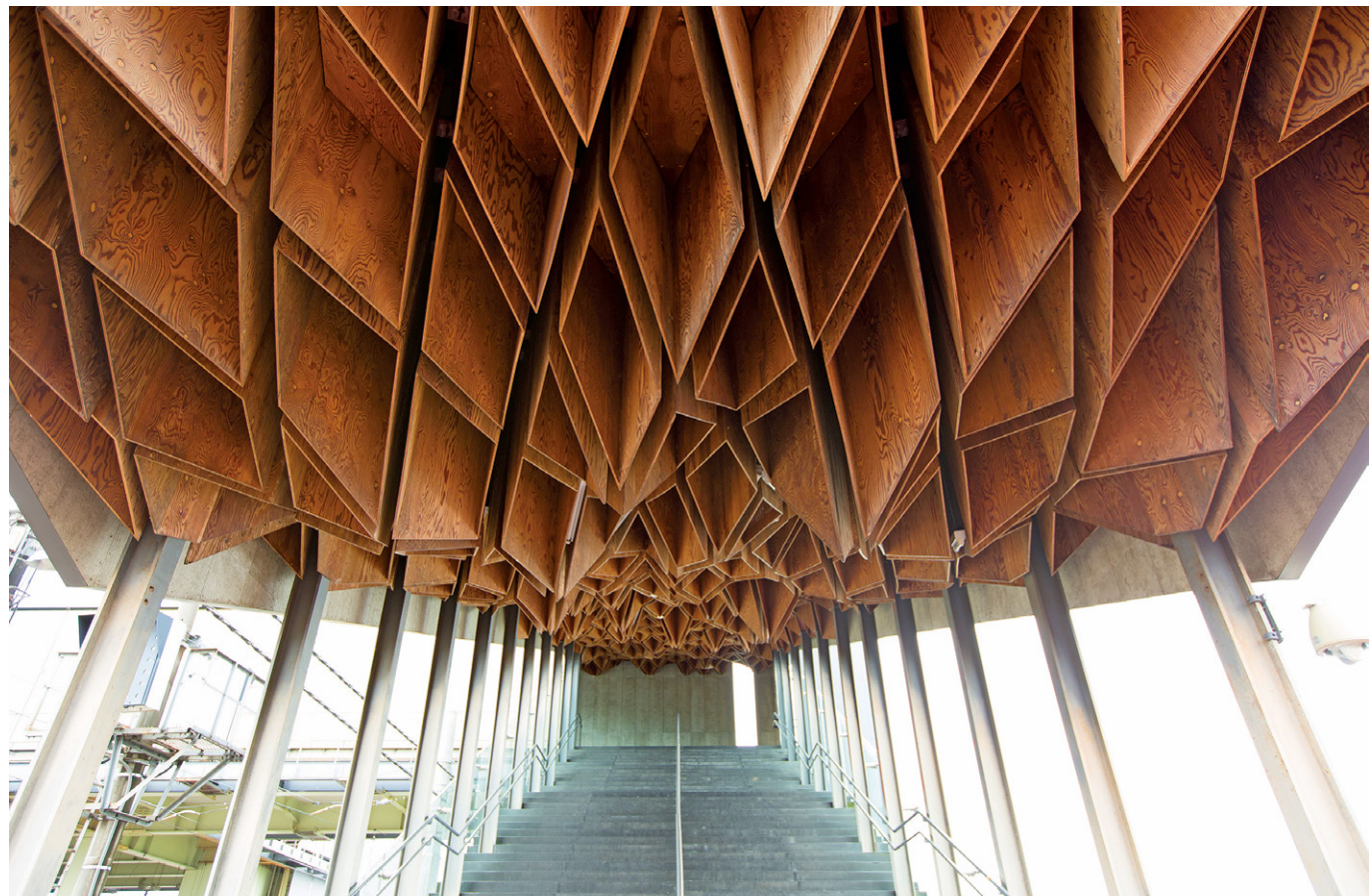
駅の前。

外光の眩しさとともに、人々の声が聞こえてくる。

広場で遊んでいる親子、ベンチに腰掛け休憩している老夫婦、音楽機材をホールへと運んでいるバンドマン、会話を楽しんでいる学生、ビジネスマン、あるいはただ通過するだけの人々…。

ここはさまざまな人々が行き交う交差点。

ここで紹介するのは、2016年7月、駅の前＝交差点を舞台として開催されたマーケットの前後から切り取ったカケラ。



前日 ダイアグラム



駅の前。

隈研吾氏が手掛けた建造物。温もりのある大谷石と、クールなダイアグラムのコントラスト。モダンさと朴訥さが同居しつつ、でも違和感は感じない、むしろ不思議と落ち着いた気分になるのは、この土地の過去・現在・未来と重なるから…？

駅。

頭上から押し寄せてくる木のダイアグラムに圧倒されながら、改札口へ。マガジンラックの前に、膨らんだリュックを背負った大学生らしき男性。高根沢町民ではないのだろうか、「駅前のマーケット」のフライヤーを手にしながら、駅舎、線路、広場を交互に、何度も眺め返す。

彼は明日、マーケット＝交差点にやって来るのだろうか？



AM8:00 ウェルカム ボード



駅の前。
マーケットのスタッフ、出店者が、慌ただしく広場内を端から端へと行き来する。
テーブル、イス、パラソル、テント、ガーランド、キャビネット、ウェルカムボード…、単色系の広場にカラフルな装飾が施され、徐々に空気が熱を帯びていく。

ホーム。
普段は乗降者が少ない日曜日のこの時間帯。今日は心なしか、電車を降りる人が多め。





AM8:30 コミチ



駐車場。

歩行者しか通れない、砂利の小径。車を駐車し、マーケット会場へ向かう人々。普段はひっそりとそこにあるマンホール、マリーゴールド、竹林も、今日は来場者を会場へと案内するような、澆刺とした佇まい。

小径。

生成りのトートバッグを抱え、駅へ向かう白いシャツの女性。小径を通るのは初めて…？物珍しそうにキョロキョロしながら、でも足早に駅へと向かう。

駅の前。

小雨の中、白い傘をさしたあの女性。まだ開場前の時間、彼女が急いで向かっていた先は、ノベルティグッズを配布する、受付テントの前。



AM11:00 ヒロバ

駅の前。

手作り雑貨、野菜、FOOD、ワークショップ…。カップル、友人、親子、老夫婦、ビジネスマン…。ゆっくりと眺める人、競い合うように物色する人、店主との会話を楽しむ人、ただ通り過ぎるだけの人…。

ふと、どこかで見かけた覚えのある男性。誰だったろう…。ああ、昨日駅でフライヤーを見ていたあの人のだ。



PMo:30

オモチャバコ

駅の前。

絵描きうたに合わせ、ダンボールの黒板にチョークを走らせる子供。親に見守られながら、工作に没頭する子供。食べているジェラートが、「さっきスクリーンに映ってた『たかねざわのうた』に出てたのと同じだ!」とアピールする子供。ドキドキしながら、ガチャガチャを回す子供。

差し込む外光が、子どもたちのまっすぐな瞳に反射し、大谷石で組まれた薄暗いホールをきらきらと輝かせる。



Child's smiling face, much, TAKANEZAWA





PM2:00 テ



駅の前。
マーケットのスタッフの女性。
一組ひと組、商品で膨らんだバッグを抱えた笑顔の来場者を笑顔で見送る。テントを解体、
収納し、テーブルを畳み、イスを積み重ねる。
賑やかだった駅の前が、整然とした佇まいを取り戻していく。

片づけが終わるとともに、スタッフらしき人々が一カ所に集まり、円陣となる。
誰からともなく差し出され、やがて全員が差し出した手が、円陣の中心で重なる。



数日後... コウボウ

高根沢町内。パン・焼き菓子工房。

芝のスロープ、三角屋根、白木の壁、青いドア。マーケット当日、小径を急ぎ、ノベルティグッズを受け取る列に並んだ、あの白いシャツの女性。

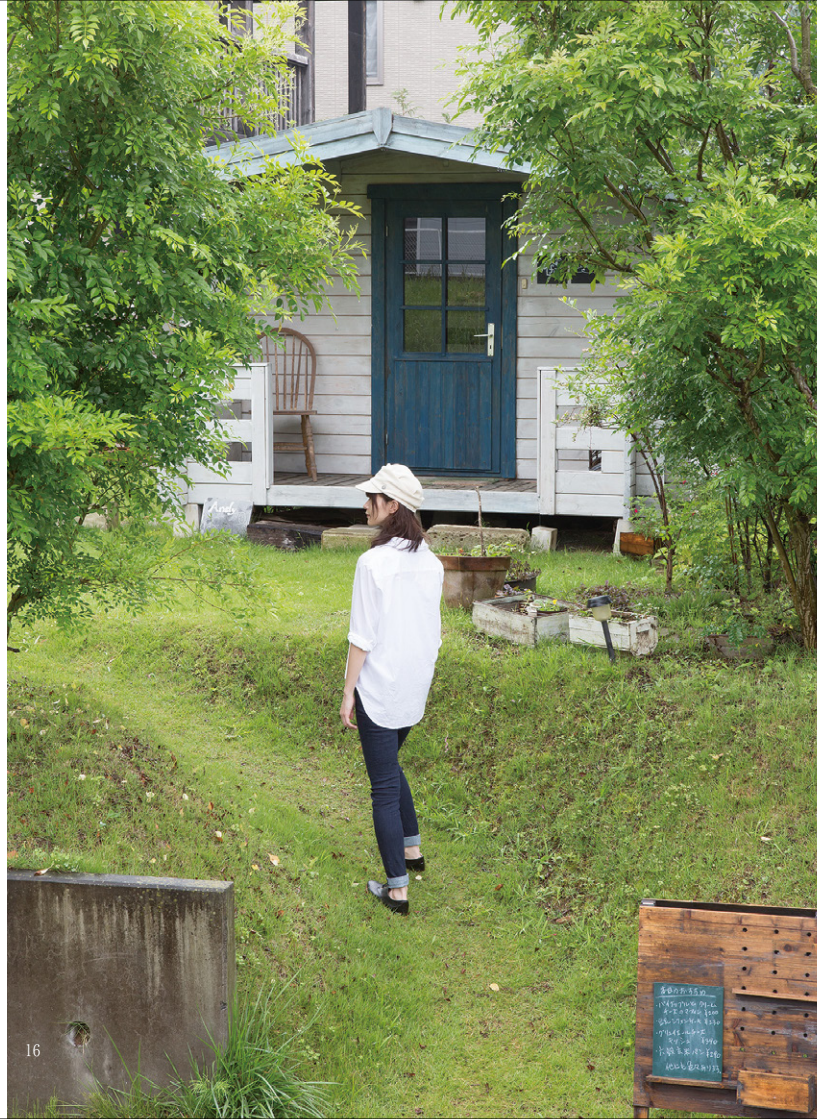
マーケットで店を知ったのだろうか、緊張気味にゆっくりとドアに手をかける様子が、はじめてここを訪れた感じを漂わせる。

店の中。

パン、焼き菓子、マフィン。あの日の情景、匂いが思い出され、女性から自然と笑みがこぼれる。

少し気が楽になったのか、思い切って、彼女は店員さんに話しかけてみる。店員さんからも笑みがこぼれる。なんとなく始まった会話がいつの間にか弾んでいき、気付いたら話し込んでいる。

勘定を済ませ、今度はしっかりとドアに手をかけた彼女は、「また来ます!」とあいさつし、店を出る。



終章

フタタビ、コウサテン

駅の前。

どこまでもゆるく、良い意味で自分本位に——。

出店者にとっても来場者にとっても身近なものであって、想い想いにこの場所で自分を表現し、自分の都合で楽しめるものであること…、それが駅のためのマーケットのコンセプト。

マーケットは交差点。特別なメッセージがある訳でも、その日限りの非日常が味わえるエッジがある訳でもない。ここにはゆるく、いろいろなものがあるだけ。

だからこそ、それらを駅の前に、ちょうど良い敷居の高さで存在させたい、そして「出てみようかな…」、「行ってみようかな…」と思ってもらえるような、身近な空間を創っていきたい。

マーケットは、ただのカケラ。

でももし、マーケットをきっかけに、誰かが何かを見つけたとしたら…、誰かと誰かにつながりが生まれたとしたら…、それはとてもかけがえのないカケラ。

さて、この交差点から、どこへ行こう？